

鞠智城の位置と調査成果

熊本県教育委員会 亀田 学

1 はじめに

今回のシンポジウムは、「古代の「辺要」政策と肥後国・鞠智城」をテーマに中央集権国家・律令制の確立を志向するヤマト政権が九州地方への支配を拡大するにあたり、特に南九州地方を視野に、古墳時代からどのように「辺要」の地を支配しようとしたのかを考える。その際、鞠智城がどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的に企画された。

そこで、まず鞠智城の概要、時間的、機能的変遷に触れ、どのような場所に位置するのか、なぜこの地に古代山城が築造されたのかを考えてみたい。

次に、鞠智城が10世紀後半まで長期間存続したことから、築造当初の役割が奈良～平安時代にかけてどのようにその機能を変化させていったのかを考える素材を提供し、鞠智城研究のさらなる深化に向けた端緒としたい。

また、併せて昨年度から実施している深迫門跡の最新の調査成果を紹介したい。

2 古代山城・鞠智城の時期区分と変遷（図1～6）

これまでの発掘調査の成果によって遺構の時期が区分され、鞠智城の役割や機能の変化として理解された。

鞠智城は、築城から10世紀中頃まで300年間以上存続したことが判明し、建物の時期変遷から大きく5期（Ⅰ～Ⅴ期）に区分し、その変遷を整理している。（図1）

なお、当該地には、縄文時代後期から遺跡が存在し、弥生時代後期の集落も営まれた。

①鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～第4四半期）（図2）

鞠智城の創建期。百済の復興支援を意図した663年の白村江での敗戦後、大野城と基肄城（椋城）が百済の亡命貴族の指導により、665年に築城されたことが『日本書紀』の記録に見られるが、鞠智城については『続日本紀』文武2（698）年の「繕治」の記事を初出とし、確かな築城年代は不明である。ただし、同時期に繕治されたことから大野、基肄の2城の築城（665年）にやや遅れて創建されたものと推定される。

城の中心部である長者原地区では、南西側（古代官道・菊鹿盆地側）に建物が集中して検出されており、5間以上の側柱建物や3間×4間以上の建物が検出されている。

長舎建物を兵舎と考えるかは別として、倉庫機能、管理・行政機能を当初からもっていたと考えられる。外郭線上に3箇所（3箇所）の城門、土塁線、貯水池などを緊急的に整備するなど城としての最低限の機能を備えた段階と考えられる。

瓦は桶巻き作りや格子叩き等の技術的特徴から1期から2期にかけて作られたものが多い。貯水池跡から出土した菩薩立像もこの時期に持ち込まれたものと考えられる。

土塁築造の積土にみられる版築技術や唐居敷という門の扉の土台となる石に開けられた扉の軸受け金具を据える穴の加工技術、貯水池の敷粗朶技法や築堤技術、排水・取水施設にかかる技術等は中国・

朝鮮半島の技術を取り入れたものと考えられる。

②鞠智城Ⅱ期(7世紀末～8世紀第1四半期前半)(図3)

『続日本紀』文武2(698)年5月条に記載された「繕治」の時期にあたる。長者原地区の建物は、北側の貯水池に向け数が増え、上原地区の高台に向けても建物エリアが広がっている。

上原地区は、削平を受けて不明な点はあるが、祭祀的な建物と考えられる八角形建物とその背後に「コ」の字形に掘立柱建物を配置した官衙的・管理棟的建物群が出現する。台地に建物エリアが大きく広がる。土器の出土量も多く、城の管理・運営に多くの人員が配置されたと考えられる。

③鞠智城Ⅲ期(8世紀第1四半期後半～第3四半期)(図4)

鞠智城の転換期。城内の建物配置はⅡ期を踏襲しながらも、総柱建物が小型礎石を利用した礎石建物に建て替えられる。長者山の背後に位置する3間×9間の大型礎石建物である宮野礎石群もこの頃建てられる。管理棟や倉の機能が充実していったと考えられる。土器の出土は少ないが、城の機能や維持・管理は行われていたと考えられる。「秦人忍□五斗」の荷札木簡はこの頃のものと推定されている。

④鞠智城Ⅳ期(8世紀第4四半期～9世紀第3四半期)(図5)

鞠智城の変革期。管理棟的建物群の消失や貯水池中央部の機能低下がある一方、Ⅲ期の礎石建物は大型礎石を利用した礎石建物に建て替えられ、食糧等の備蓄機能が主体となる。これら建物群は、当該期末に焼失しており、『文徳天皇実録』天安2(858)年の記事に見られる不動倉の火災との関連が想定される。また、礎石・掘立柱併用建物3棟も確認されている。

⑤鞠智城Ⅴ期(9世紀第4四半期～10世紀第3四半期)(図6)

鞠智城の終末期。城内の建物数は減少し、城の機能は低下するものの、大型の礎石建物が建て直されるなど、食糧等の備蓄機能は存続する。

3 鞠智城の位置(図7～27)

(1) 菊池川流域における古墳時代から古代の遺跡の分布

官衙としては、玉名郡衙(家)・郡倉がある。立願寺字石丸・馬場・三郎丸から礎石建物・布目瓦、字西の段から長方形の柵列に囲まれた8棟の建物・炭化米や材・礎石が見つかっており、郡倉に比定されている。郡寺としては、字塔の尾に立願寺廃寺があり、単弁蓮花文軒丸瓦や桶巻き作りの瓦が出土しており、7世紀後半までさかのぼる。(図8) 郡家と水駅を直線的に連結させる側溝を有する唐尺12尺の郡衙道が推定されている。7世紀後半代から立願寺大塚遺跡を含めた官衙周辺の関連集落や隣接する柳町遺跡、さらに菊池川上流に位置する小田宮の前遺跡等とネットワークでつながっていたと考えられる。(表1) そうした集落や官衙関連遺跡の周辺の丘陵には古墳時代中期から後期にかけて、舟形石棺をもつ古墳や横穴式石室をもつ有力な古墳があり、その造墓集団を祖先にもつ有力な在地勢力が基盤となっていると考えられる。

下流域の東部には、江田船山古墳が築造される。冠や沓(くつ)や帯金具等、伽耶や百濟等朝鮮半島の文化から影響を受けた遺物が多数出土している。直弧文の浮き彫りを施した横口式家形石棺をもつ筑後川中流域の石人山古墳等に影響を受けた埋葬施設が採用されていることと併せて、江田船山の被葬者は環有明海地域を統括するような古墳時代中期後半の筑紫(筑肥)地域の有力な豪族であったと考えら

れている。

また、全長 100m を超える前方後円墳で埴輪をもつ中期後半から後期の稲荷山古墳が造営されているし、甲冑や石製表飾をもつ石障系石室の伝左山古墳等は、当該地域における複室構造の横穴式石室の初源でもある。古墳時代終末には、切石造石室の江田穴観音古墳が築造される。菊池川下流域の勢力が先進の墓室構造を取り入れている。

菊池川中流域の官衙遺構としては桜町遺跡が、古代の集落としては、弥生時代以来集落が営まれる方保田東原遺跡が中心となると考えられるが、詳細は、今後の調査次第である。駄の原遺跡で掘立柱建物が見つかったり、8 世紀後半代からと考えられる。(表 1)

菊池川の支流の岩の川流域で古墳時代中期には 100m を超える前方後円墳の岩原双子塚古墳が造営される。また、前期古墳の竜王山古墳に隣接するひょうたんびら山の山頂に全長 65m 以上の前方後円墳の銭亀塚古墳が築造される。(図 10) 石障をもつ初期横穴式石室を主体部にもつ。

上流域左岸には、円墳で器材形石製表飾をもつ前方後円墳の木柑子フタツカサンと木柑子高塚古墳が現れる。器材形石製表飾と共に石人が見つかり、肥後北部と南部の両方の要素をもつものである。木柑子フタツカサンは 6 世紀の後半の古墳で石製表飾を持つ古墳としてはやや時期が下る等、石製表飾が分布する文化の東側の縁辺と考えられる。また菊池川右岸の径約 15m の円墳である袈裟尾高塚古墳は平天井の石屋形を持つ横穴式石室を主体部とする古墳で、石室に盾型の石製表飾を石材に組み込んでおり、肥後南部の影響も受けている古墳である。(図 12・13)

この周辺に竹の上の原遺跡があり、7 世紀代から古代の集落が営まれている。遺構は、8 世紀後半代の竪穴建物や掘立柱建物を中心だが、遺物包含層から 7 世紀の土器も出土している。(表 1)

また西側の御宇田台地には、円面硯、石帯、越州窯青磁が出土している御宇田遺跡群があり、7 世紀代の土器も出土していることから、集落が存在したようである。(表 1) 古墳時代には、御宇田台地には津袋古墳群が築造されている。この古墳群は主体部に舟形石棺や箱式石棺を持ち、縁辺には竪穴系横穴式石室を主体部にもつ朱塚古墳があり、壁画系の装飾古墳である御霊塚古墳も築造されている。石棺や竪穴系横穴式石室・装飾古墳を持つ他地域からの多様な文化を取り入れた有力な豪族の墓であろうが、いずれも円墳で墳形の規制を受けていたものと考えられる。弥生時代中期以来の有力な集落が存在した地域と考えられ、鞠智城を支えた在地勢力であった可能性が高い。こうした、在地勢力の背後に鞠智城は位置し、在地の有力な勢力の協力を得ながらもそうした勢力を牽制するために築城されたと考えられる。

鞠智城周辺の集落や官衙的施設を俯瞰すると 7 世紀も集落は存在したと考えられるが、現在のところ小規模と推定され、8 世紀後半代から 9 世紀にかけて集落が広がっていたと考えられる。菊鹿盆地の開発もそのころ進んでいたと推定できる。(表 1)。8 世紀後半代以降の鞠智城は、菊鹿盆地の開発にあたり、郡衙や官道沿いに設けられた官衙的施設を補完する施設として機能していたと考えられる。(図 19)

菊池川支流の合志川流域も有力な地域である。古墳時代中期には武具・武器の分布・王権や渡来系文化の影響をもつ地域と考えられる。合志川流域には、マロ塚古墳や上生上の原古墳等の甲冑をもつ古墳が存在し、ヤマト王権とのつながりが考えられる。上流域の森北では、把手付初期須恵器が出土しており、平町遺跡では軟質の格子目タタキをもつ甗等が出土し、いち早く竈が採用される集落が存在する。

このことから古墳時代中期のこの地域は、韓半島とのつながりも強かったものと考えられる。石障系の初期横穴式石室をもつ石川山古墳群や横山古墳（図 10）のように仕切りはあるものの複室構造は発達せず、長い羨道をもつ壁画系装飾古墳があり、白川流域の地域との関係が見られる。

鞠智城の北西側に位置する松尾神社は、秦氏に関連する勢力が建てたものと考えられている。鞠智城周辺には築造前も築造後も渡来系集団が在住し、鞠智城を支えていたと考えられる。

（2）技術からみた筑後地域との関わり

① 須恵器の産地

鞠智城出土の 6 世紀後半から 7 世紀までの須恵器は八女産の須恵器が多く、筑後地域との関係が深い。8 世紀後半以降になると菊池川上流域の北部の小岱山からの須恵器の供給が多くなる。

こうした在地産が増えるにあたっては、周辺の渡来系技術集団の他八女地域の窯業の技術的流入及び生産集団の移動があった可能性が考えられる。

② 埴輪製作技法（図 14）

岸本圭氏らの研究によると埴輪の最下段突帯の押圧技法等が菊池川下流域の塚坊主古墳や菊池川中流域の金屋塚古墳等に見られ、八女市の立山山 2 号墳や鶴見山古墳など筑後地方の埴輪との製作技法の共通点が多い点が注目される。

③ 舟形石棺と石屋形の分布（図 13）

高木恭二氏の研究によれば、北肥後型と呼ばれる屋根形で石枕をもつ短辺に縄掛け突起をもつ形式の舟形石棺の広がり、矢部川流域等南筑後に広がっている。両地域の密接な関係が伺える。

石屋形を有する古墳の分布は、弘化谷古墳や童男山古墳等筑後地方に広がっており、同じく筑後地方との関係が伺える。また、平天井のものと家形を呈する形式の分布が入り乱れている境界あたりは他地域への伝播の中継地点にもあたる。

④ 横口式家形石棺の分布

横口式家形石棺は、筑後から熊本県南部にかけて分布が広がる。全長 110m を測り直弧文等の文様が刻まれた横口式石棺を持ち磐井の祖先の墓と推定される八女の石人山古墳や全長 60m の前方後円墳の久留米の浦山古墳が先行する。菊池川流域の江田船山古墳や城南の石之室古墳の他氷川流域の野津古墳群にも存在する可能性があり分布は広がるが、菊池川流域が分布の地理的中心と考えられる。

⑤ 石製表飾品（石人・石馬）の分布（図 12）

高木恭二氏の図によると八女市岩戸山古墳を中心に石製飾品が見られ、横口式家形石棺の分布と併せて筑後地方との関係が窺える。図が示すように菊池川流域中・下流域等では、石人（人物）や短甲等が中心だが、氷川流域などの肥後南部では器材形を中心とする。

鞠智城が存在する菊池川上流域では、木柑子フタツカサン・木柑子高塚古墳等で石人と笠形石製品等が共存し、袈裟尾高塚古墳は盾形の石製表飾品が石材として転用されているなど、両者の文化の接点になっていると考えられる。

⑥ 垂飾付耳飾りの分布（図 16）

高田貫太氏の分析によると垂飾付耳飾りは倭と地理的に近く密接な関係を持っていたと考えられ

る伽耶系が多いが、九州では百済系のものは、江田船山や大坊古墳等で見られるのみである。ただ、両古墳とも伽耶系のものも含まれること、また、百済系のものにも新羅系の技術が見られることが指摘されている。一方、筑前地域には新羅系のものも見られる。有明海からの百済系文物の流入。玄界灘からの新羅系文物の流入、地方豪族と朝鮮半島との直接的な結びつきも考えられる。その一方、有明海沿岸を中心に垂飾付耳飾を保有しているという文化の共有も重視される。

(3) 阿蘇地域と鞠智城 (図 17)

延喜式の駅路でも阿蘇への分岐点にあたり、切石造りの横穴式石室の分布 (高木恭二 2012) から見て鞠智城の位置は菊池川流域から阿蘇地域に築造技術や石材運搬のルート上に位置すると考えられる。

阿蘇地域の古墳時代は、南側から植木の鬼のいわや古墳、石川山 4 号墳、西側から菊池川中流域の弁慶ケ穴古墳等からの影響が見られる。

また、延喜式に「二重 (ふたえ) の牧」「波良馬 (はらのうま) 牧」という阿蘇郡内に推定される地名が記載され、大宰府の兵馬や駅馬に常備されていることから、律令政府にとっても重要な区域でそれ以前も律令制の整備にあたって重要な地域であったと考えられる。

鞠智城の所在する当該地は、古墳時代以来筑後地方との関わりや筑紫君との関係性も強く熊本平野からは植木台地、合志台地を経由する古墳時代の重要なルートが築かれており、また阿蘇地域への分岐点にもなる重要な地点である。(図 15) 菊池川下流域からの東西ルートは古墳時代から存在するが、南北ルートは 8 世紀から 9 世紀にかけての古代の官衙関連遺跡を結ぶルートである。このルートに隣接して鞠智城は築かれたと考えられる。(図 19) 初期大宰府 (那津官家 (なのつのみやけ) を含む) の防衛のために鞠智城が造営されたとしても延喜式の官道からも離れており、そればかりが造営の狙いとは考え難い。

また、有明海からの文化の流入、大陸からの進上路の一つであり、阿蘇地域の勢力を牽制する役割や、豊後・日向へのルートに対する抑えとしての機能も考えられる。

(4) その他の肥後における勢力分布と鞠智城

① 肥君の本貫地周辺地域

a 益城郡周辺 (図 7・8・10・11)

緑川流域の熊本市南区城南町周辺は、初期の国府の所在が推定されている地域である。陣内廃寺は法起寺式の伽藍配置をもち、単弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦など老司式系の瓦が出土している。供給された窯跡は陣内瓦窯跡である、益城国府は松本雅明氏によりその場所が比定され、益城軍団、益城郡寺 (志道寺)、益城郡家 (鰐瀬宮ノ前遺跡 (大明神))、陣内蔵司等が比定されている。八ノ瀬戸窯跡、東亀島窯跡、野田窯跡等の須恵器生産の窯跡も存在する。

陣内廃寺がある緑川流域の地域は、古墳時代中期から後期にかけて琵琶塚古墳、陣内狐塚古墳・沈目甚九郎山古墳 (装飾古墳) 等の前方後円墳が造営され、横口式家形石棺をもつ石之室古墳やりゅうがん塚などの石障系の横穴式石室をもつ古墳があり有力な豪族がいた地域である。

b 八代郡 (肥君の基盤地域ともいわれる地域) ((図 7・8・10・11)

興善寺廃寺が他の肥後地域と異なる単弁の蓮花文軒丸瓦等が出土している。法起寺式伽藍配置をもつ寺で八代郡寺と推定されている。複弁のものも蓮弁の半径が短く、連珠間の距離が短い特徴をもつ。

宮地勧行寺遺跡から円面硯や軒平瓦、西片町遺跡から円面硯等が出土しており、平原瓦窯跡が存在し、それが陣内廃寺に供給されていること等から八代・益城地域の密接な関係が窺え、宇土郡の古保山廃寺を含めて有力な地域であったと考えられる。

また、平原瓦窯跡の位置する氷川流域は古墳時代後期になって大型の前方後円墳が集中する地域である。それらの主体部が家形石棺、横穴式石室、礫槨墓等形式が異なり、埋葬様式多様である。古城史雄氏が指摘するように物見櫓古墳が複室構造の横穴式石室、中ノ城古墳は単室構造の砂岩割石積み横穴式石室で凝灰岩の石屋形が屋根形になっている等から八代海沿岸だけでなく他地域の墓制の影響を受けていると考えられる。端ノ城古墳は礫敷に石棺で横口式家形石棺の可能性が指摘されていること等からも葬送の保守性を考えると様々な地域の影響を受けた古墳群と考えられる。

垂飾付耳飾や石製表飾も分布し有明海の筑紫の君の文化圏にあるものの、器材形の石製表飾が突出する等の点で地域性・独自性が窺える。また、その後の前方後円墳と判明した大野窟古墳の横穴式石室は巨大で石棚をもつ等の技術的な到達点でもある。(図 16)

この地域の古墳は、後期古墳にしては、姫ノ城が約 86m の前方後円墳など九州でも屈指の規模を誇る地域であり在地勢力の独自性と勢力の大きさが窺える。

氷川・球磨川流域は、古墳時代終末期になっても古墳の築造が継続し、主体部にいわゆる鬼の岩屋式石室①中高天井②奥壁から入り口までの幅がほぼ等しい。③独立袖石④両袖型複室構造⑤安山岩を採用する。

C 宇土郡 (図 7・8・10・11)

古保山霊雲寺遺跡では複弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、8 世紀後半代の郡寺に伴うものと考えられる。古保山打越遺跡では、奈良時代中葉から平安時代前葉までの竪穴建物、掘立柱建物（総柱建物も）、溝状遺構（道路関連も）が見つかり、7 世紀代の遺物も少量含まれていることや炉壁や炭焼き窯・布目瓦等も出土していることから古くからの拠点集落と考えられる。

肥後地方で前期古墳が集中している箇所は、玉名平野特に玉名湾（島原湾）周辺だが、宇土半島基部にも前期古墳が集中する。スリバチ山古墳、弁天山古墳、城ノ越古墳、向野田古墳等である。

肥後地域では、まず壺形埴輪が次に円筒埴輪が出現する。向野田古墳は初期の円筒埴輪をもつ。幅広い突帯は柳井茶臼山古墳関連があると考えられている。

宇城地域は、中期には、周溝の調査により 100m 以上と推定される前方後円墳でコンパス文の初期須恵器をもつ松橋大塚古墳や画文帯神獣鏡などを副葬し石屋形を配置した横穴式石室を主体部とする 60m 以上の規模の国越古墳、石棺式石室の構造を主体部とする宇賀岳古墳等山陰地方の影響を受けたもの等がある。

②肥後国府の位置と鞠智城 (図 7・8・10・11)

肥後国府は、どこにあってどのように変遷したかは明確に判明していないのが実情である。松本雅明氏は、7 世紀末は陣内廃寺周辺に益城国府（7 世紀末）を想定しており、トレンチ調査により、土塁構造があり、8 世紀中頃から託麻国府を想定している。9 世紀中頃から、飽田国府（二本木遺跡群）に

移転したと考えている。様々な説があるが、最近の熊本駅周辺の開発による調査で二本木遺跡群が調査されて、国府に想定される大規模な総柱建物やそれに伴う建物群が見つかり、8世紀後半から9世紀にかけては飽田国府が有力になってきている。

文献史料では、「和名類聚抄（平安時代）」には国府を益城郡、「伊呂波字類抄（鎌倉時代）（飽田国府「拾芥抄」（鎌倉時代）には国府を「飽田郡」に所在が確認できる。

託麻・飽田周辺の主要な古墳の分布であるが、白川中・下流域には前方後円墳がなく、後期になり円墳ではあるが、装飾古墳や肥後型の横穴式石室が金峰山南麓及び東麓に分布する。

甲元 真之氏は、金峰山南麓の千金甲2号墳と筑後の弘化谷古墳との装飾や玄室の胴張り構造など構造上の類似から両地域の関係性を強調している。

金峰山東麓の釜尾古墳と日の岡古墳が線刻で縁取りなしに図形を描く点赤・青・黄・白の4色により描かれている点や石室の石積みの状況から類似点が多く関連性を指摘している。また筑後南部は羨道の発達が見られない点や胴張りが多い等の相違点等も指摘でき地域性も看取される。

古墳時代には筑後地域と関係はあるが、菊池川流域ほどの密接な関係はなく部分的と見られる。

古墳時代には前方後円墳等がみられない地域に国府が造営された点は、鞠智城の選地と類似していると考えられる。

③ 肥後国周縁地域と鞠智城（図7・8・10・11）

肥後西南部（天草上島から球磨・芦北地域）にかけては古墳時代前期後半から中期にかけて川内川上流域の大口・えびの盆地から薩摩地域北部にみられる（地下式）板石積石室墓が分布する。

墳丘を持たず、群集する。鉄鏃等は副葬されるが、土器などの埋納がみられないのが特徴である。芦北地域はその分布の北縁として重要な地域である。

一方 球磨地域では、錦町に亀塚古墳群という3基の全長45～50mの前方後円墳が営まれている。1号墳は、甲冑、直刀、土器が出土したということと墳丘から中期を中心とした古墳群と考えられる。あさぎり町の才園古墳群は6世紀の古墳で墳形は不明だが円墳と考えられ、横穴式石室を主体部とするもので2号墳には鍔金獣帯鏡、金銅饗鏡板、金銅子葉文透彫杏葉、金銅杏葉、金銅雲珠、金銅辻金具等が出土しておりヤマト王権とのつながりが考えられる。

他に多良木町の胴張りの玄室に幅の狭い玄室がつく赤坂宝塚古墳のほか、鬼の釜古墳等の巨石で構築された横穴式石室墳が分布する。また、水上村の6世紀代の横穴式石室を主体部とする千人塚古墳群等球磨地域には横穴のほか横穴式石室も多い。また、相良村の吉の尾古墳群には縦穴系横口式石室が存在することから有明海沿岸や北部九州地域とのつながりが見られる。

装飾が見られる横穴群も外壁の羨門部分に浮き彫りされるもので、大村5・7・11号墳は、靱・弓・盾等の武器・武具の浮彫りをもつ等、菊池川流域の鍋田横穴群との共通点が多い。7号墳では、飾り縁に連続三角文の葉研彫りが見られる。玉名市石貫ナギノの飾縁に円文を施す等に類似点が求められる。以上のように多様な文化が見られる地域で文化の交流地点として重要である。

古代の遺跡としては、天道ケ尾遺跡や沖松遺跡等で9世紀代の遺跡が調査され、天道ケ尾では掘立柱建物が見つかり、また、前田遺跡では、9世紀代の軒丸・軒平瓦・鬼瓦が表採され郡衙や寺院跡と考えられる。高山瓦窯では違う紋様の軒瓦が表採され、下り山窯跡等奈良時代の窯跡が見つかり、

るほか、窯跡が多数存在する地域で古墳時代以来各地からの文化の影響が見られる重要な地域であったと考えられる。

(5) 南九州と鞠智城 (図 18・20～27)

①日向地方の古墳の動向(図 20～23)

古墳時代前期から大淀川流域の宮崎平野に九州最大の前方後円墳生目古墳群内の 1・3 号墳が築かれる。いずれも 140m を超える規模を有する。豊前の石塚山古墳より大きい。

また、中期には、日向国府がある児湯郡、一ツ瀬川流域の西都原古墳群では、中期前半に 175m の帆立貝形の前方向後円墳男狭穂塚古墳、全長 180m の女狭穂塚古墳が築かれる。女狭穂塚古墳では円筒埴輪や朝顔形埴輪の他家形・盾形・冑形・短甲形・草摺形の形象埴輪が出土している。後期にかけては祇園原古墳群が、中期から後期にかけて祇園原 59 号墳・百足塚古墳 (80m)・弥吾郎塚古墳などの前方後円墳が築かれる。日向地域は、九州でも突出して大きな前方後円墳が作られている地域であり、ヤマト王権が恐れた地域とも考えられるのである。(図 23)

また、鹿児島県の志布志湾沿岸や肝属(きもつき)平野に前期(塚崎古墳群 39 号墳は 67m)から後期初頭にかけて前方後円墳が築かれる。特に、中期には九州最大の規模をもつ全長 154m の唐仁大塚古墳(長方板革綴短甲が副葬品?)に引き続き、全長約 140m の横瀬古墳が築造される。菱形を重ねたような線刻がある埴輪や初期須恵器の朝倉産に類似する筒形器台が出土している。埴輪の畿内の制作工人の関与が指摘されている丁寧なものである。「日本書紀」仁徳紀には仁徳の妃の一人の日向髪長媛が日向の諸縣君(もろあがたのきみ)牛諸井の女(むすめ)であること等からヤマト王権とのつながりと同時に婚姻関係を結ばなければならないほど重要な勢力であったことは間違いない。

江田船山古墳と同型鏡の画文帯神獸鏡が宮崎県持田 20・24・25 号墳にあり、国越古墳と同型鏡の画文帯神獸鏡は持田 1 号墳(計塚)、新田原古墳群中の山ノ坊古墳にもみられることから、日向地方との関係が看守される。(図 18)

南九州は甲冑の出土も多く、畿内の甲冑と類似し、吉村 和昭氏等の研究によれば畿内政権が付与したか型紙を提供したかである。

南九州では、中期から地下式横穴墓という在地制の強い墓制が南九州の東側に展開する。副葬品を見ると武器・武具類が副葬されていてヤマト王権との結びつきも多いが、石鏃の型式や墓の形式の独自性が強く、地域勢力がヤマト王権に対して対抗していたとも考えられる。(図 21)

『日本書紀』推古 20 年(612)の条、推古天皇の歌に「馬ならば日向駒」と記述があるように日向に牧がいくつか管理されていたと考えられる。馬の骨や馬具を伴う土坑が 5 世紀代から存在し「牧」等の存在も指摘されている。ヤマト王権としても重要な地域であったと考えられ、律令制による西海道の整備にあたって不可欠な地域であったであろう。

西側は熊本県南部(芦北・水俣・球磨郡)にも分布する(地下式)板石積石室墓が展開する。(図 22)横穴墓は、装飾古墳の円文の浮き彫りや壁画系のものは肥後地域と類似しておりその影響が見られる。

②南九州の国分寺系の瓦(図 24～27)

702 年に薩摩国が設置され、713 年に大隅国が日向国から分置された。720 年の隼人の乱以降は、律令

制の導入が南九州で進んでいったと考えられる。(図 25・26)

日向国分寺の軒瓦は肥後や大隅国分寺の影響がみられると考えられるが、九州内の特定の地域の系譜をたどるのが難しいとされる。平瓦の平行条線のものや途切れ途切れの縄目タタキを残すもの等在地的な要素が強い瓦であるといえる。

大隅国分寺の瓦は、日向国分寺や肥後国分寺の影響を受けている。日向国分寺系の軒平瓦で偏行唐草文の内区に珠文の外区がある。鐙はなく丁寧なへう調整である。斜め格子の叩きをもつ平瓦は筑前・肥前等に見られる技法で古い要素が見られる。(図 26)

軒丸瓦は、複弁蓮花文で中房蓮子 1+8, 周縁珠文が 16 である。筑前・豊前・豊後等北部九州の国分寺等の影響が見られる。平瓦は外面に斜格子目タタキを残しているのは、筑前の堂ヶ尾廃寺や肥前の冬野瓦窯跡・帯隈山瓦窯跡の平瓦に類似する。

薩摩国分寺については、肥後国分寺の影響が強い。創建時の軒丸瓦は肥後国分寺に、軒平瓦については豊前国分寺の瓦当に類縁が深いと指摘されている。隼人の乱以降における豊前国からの移住等の影響とも考えられる。(図 27)

日向国分寺の瓦には地域性が色濃く見られるが他地域は肥後国分寺や筑前・豊前・豊後等の北部九州地域の瓦の影響を受けている。このことから、大宰府から肥後を通じて日向・大隅に伝わるルートと(大宰府や肥後)・豊前・豊後等いろいろなルートによる物流や文化の流入、伝播のルートが考えられる。

こうしたことから、大宰府等の西海道の律令制の整備の上で、大宰府直轄の多様な支配拠点が必要であった可能性が高い。律令制の整備が進み、国分寺や国府が整備され、郡衙や郡寺が整備されると鞠智城もその官衙的機能が限定されたとしてもその後の律令制維持のために機能したと考えられる。

三野城・稲積城が北部九州のそれぞれ筑前国那珂美野駅・福岡県糸島市志摩稲富等に推定されているが、『続日本紀』文武天皇三年(699)十二月四日条の「大宰府をして三野・稲積の二城を修らしむ」という記事が見られ、南九州説の日向国児湯郡三納郷・大隅国桑原郡稲積郷も考えられる。

(6) 周辺地域からみた鞠智城の位置

菊池川流域は、筑後地方とのつながりが密接で、阿蘇や合志川流域をとおり古墳時代以来の植木東路に位置する交通の要衝である。鞠智城は、菊池川中・下流域の有力な豪族の背後に立地している。

肥後国中南部は古墳時代以来地域性を持ち、他地域との交流を含めたネットワークと地域の拠点としてそれぞれの地方豪族が強力な地盤を持っていたことが考えられる。

特に、肥君の根幹地周辺の文化は古墳時代後期以来、筑紫地方との交流を行っていたが、ヤマト王権を介さず朝鮮半島と直接交流を持っていた筑紫の一部の地域と結びついて独自の勢力基盤を築いていたと考えられる。また、天草地域は製塩や砂岩といった良質な石材、有明海を通じての文化・船団等、球磨地域は南九州(日向・大隅・薩摩地域)の文化と肥後地域との接点ともいうべき役割を果たしており、それぞれ独立性が強い。肥後中部から南部の勢力は、律令政権にとって重要な地域であると同時に警戒すべき勢力であったと考えられる。緑川流域や氷川流域の前方後円墳を築造した勢力と菊池川流域の勢力との間で前方後円墳の少ない白川流域に国府が置かれる等地方豪族の勢力基盤の隙間に国の施設を造

営したとも言える。地方豪族が律令制を受け入れる中で郡衙に地方豪族を取り入れ、国府に大宰府から役人を送り込む等がなされたと考えられるが、その拠点として、国府の機能が十分働くまで古代山城の一部が活用された可能性が考えられる。

同様に南九州地域を見ると、日向・大隅地方で南九州でも在地豪族は古墳時代中期に最大規模の前方後円墳を築き、ヤマト王権と結びつき、その後は独自の墓制を築く勢力を含みながら、在地勢力の基盤を固めていった。日向の国は在地性が強く、ヤマト王権・律令政府が南九州への支配をすすめるために筑後地方との関係が深い鞠智城は、肥後南部の勢力や阿蘇地域の在地勢力を牽制しながら管理・運営する拠点として機能した可能性があると考えられる。

4 最近の調査から（令和2・3年度の発掘調査）

（1）調査目的

令和2・3年度は、深迫門跡のこれまでの調査でなお未解明であった次のア～ウの課題（ア 城門の位置の特定とその構造の解明、イ 登城道の構造や方向の特定、ウ 城門付近の土塁の積土（版築）の状況やその背後の構造等）を確認するため調査を実施した。

調査の実施にあたっては、鞠智城跡保存整備検討委員会や専門調査員による指導・助言を仰ぎ得ながら、第16次調査（平成6年度（1994年度））及び第28次調査（平成18年度（2006年度））に実施した北西側調査区の壁面の土層断面を再度検証することにより、登城道の構造、土塁の構造などを明確にすることを目的として実施した。

（2）調査の成果（図28）

ア 土塁における版築構造の確認

- a 黒色の地山と推定できる斜面堆積の層の下部を幅 60cm 程度に3段以上の（地山整形の階状の）平坦面を造っている。
- b 斜面堆積の地山の上に白色粘土・黄色粘土を中心とする土と褐色シルト層を交互に 60cm 程度の積土をしている。
- c 階段状の整形した内側（谷側には現段階の下層は 5cm 程度の層を版築（はんちく）して壁を造っている。黄色粘土に白色粘土が混ざる層と暗褐色の土を交互に混ぜながら積みあげている状況が観察できる。さらに内側には、門等を造成するための白色からピンク色の火山灰の風化土壌と褐色土を固めた版築土が見られる。
 - * （版築土）違う種類の層を交互に積み上げて、突き固めて強固な地盤を造る技術
- d c の上層は、谷がある程度埋まった段階で暗褐色の土を中心に黄色の粘土を少し混ぜた土を 15cm 程度の単位で積みあげている。
- e さらに新しい段階では、ブロック状の暗褐色の土を埋め込んで上層を凝灰岩の風化した白い土で平坦に整形している様子が伺える。

イ 門周辺の土塁及び門構造に関して

版築土の下層に3段の石積みを検出した。土塁の基底石と考えられるが、その石積みを土塁状に版築し、外側に強度の高い版築技術を用いた土塁が形成されていることを確認した。

土塁の内側にも版築を施しているが、ややしまりが弱い。

さらに内側には、明確な版築の土塁に類似している版築が見られることから、土塁の幅を狭めるための造成とも考えられたが、掘り込みとも考えられる。掘り込みと考えると約2m以上、深さ90cmである。その大きさから、ア．排水のための枡 イ．唐居敷の抜き取り痕跡等の造成を簡易に埋めている穴等の可能性を推定している。

また、南側の土塁内側の土坑も北側の埋土とは差があるが同様な掘り込み、もしくは溝の掘り込みを埋めた痕跡も相対するものである可能性がある。イであれば、門推定地ということになる。

上層の谷部の石敷きは鞠智城後半以降の登城道か谷部の排水施設なのか。階段状に構築されている状況ではないが、土塁の傾斜方向に沿って石列を積んでいる可能性もあり、土を被覆して使用された可能性もあり、構造の把握が必要と考えられる。

ウ 土塁を保護する盛土

土塁中段のトレンチ（28次5トレンチ）を再調査した結果、柱穴は、その位置関係からしっかりした版築による土塁の裾に伴う可能性が高いと考えられる。また、その外側の石敷きは土塁外側を保護する保護（外皮）盛土だと考えられる。

さらに、南側の土塁の基底石とその外側を被覆している層の下層で石敷を検出した。これらのことから南側の外側版築盛土の保護（外皮）盛土の基底部の高さは、土塁の基底部より30cm程低いことが判明。これは、南側の土塁の調査成果（28-8）等と同様の成果である。

内側の保護盛土の面は2面以上ある。間に自然堆積層があり、補修と考えられる。

最上層の円礫の登城道もしくは、排水面を含めると、1）外側（山側）土塁構築面、2）石敷造成面、3）第1次保護盛土面、4）第2次保護盛土面、5）円礫登城道面の5段階、3時期以上存在すると考えられる。

また、土塁外側の石積は、南側の方がやや低く、幅が広い。登城道はいくつか存在すると考えられるが、南側土塁裾のルートが登城道の有力なルートと考えられる。

(参考文献) 図版の引用文献の他、

『城南町史』松本雅明 1965 城南町、

『須恵村誌』須恵村 1995、

『肥後のお役所』城南町歴史民族資料館 2004、『日本の古代遺跡 38 宮崎県』保育社 1988、

『日向諸県君と葛城氏』2017 西都原考古博物館

『葆光』甲元 真之 2017、

『儋漠』甲元 真之 2019

等を参考にした。



図1 鞠智城全体図



図5 鞠智城跡Ⅳ期の建物

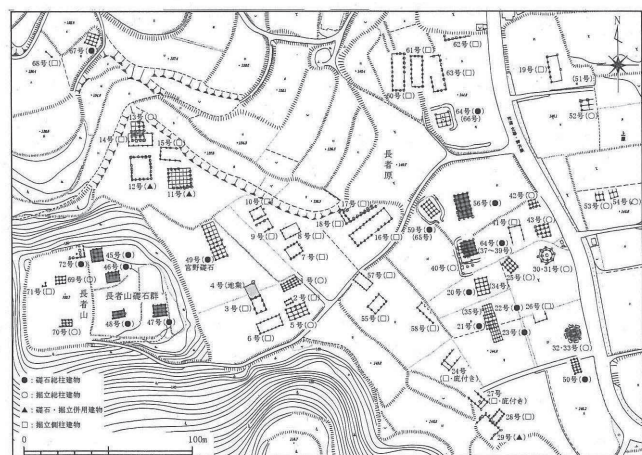


図6 鞠智城跡Ⅴ期の建物

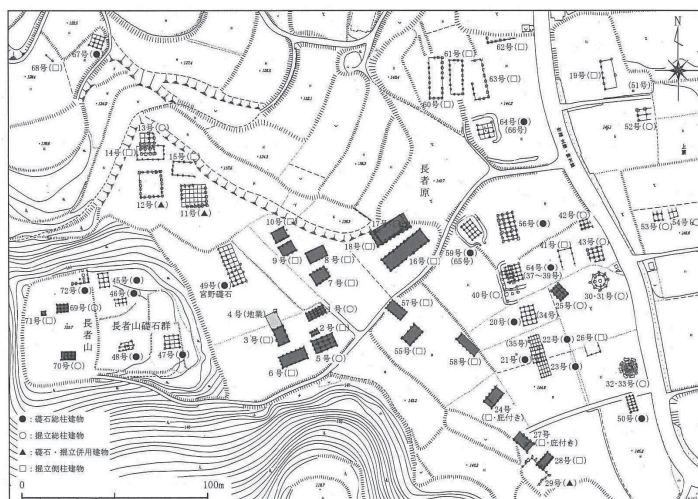


図2 鞠智城Ⅰ期の建物



図3 鞠智城跡Ⅱ期の建物

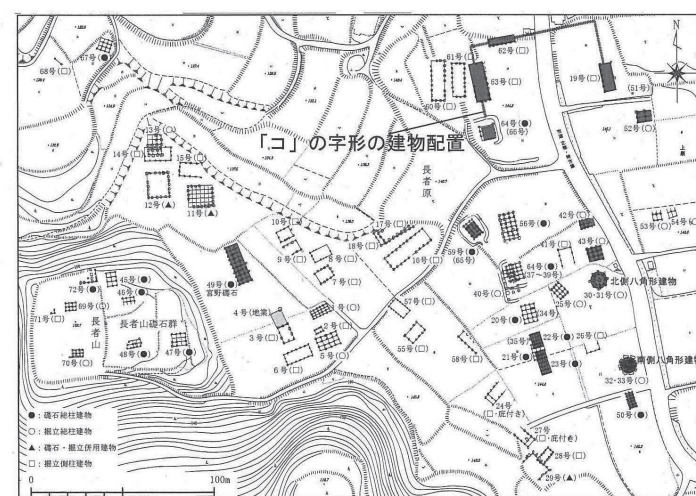


図4 鞠智城跡Ⅲ期の建物



第1図 寺院址位置図 (藍界は「戦前編纂内図」明治18年7月改による)

1. 陳內厝寺 2. 國分豐寺址 3. 國分尼寺址 4. 龍寶庵寺 5. 十通寺庵寺
6. 水鼓寺庵寺 7. 慈忍寺址 8. 大道寺庵寺 9. 立顯寺庵寺 10. 補位庵寺
11. 水鼓寺庵寺 12. 水鼓山庵寺 13. 水鼓寺址 14. 龍寶寺庵寺

図7 肥後寺院配置図（「肥後古代の寺院と瓦」1984）

[illegible]

表1 菊池川流域古代集落変遷表

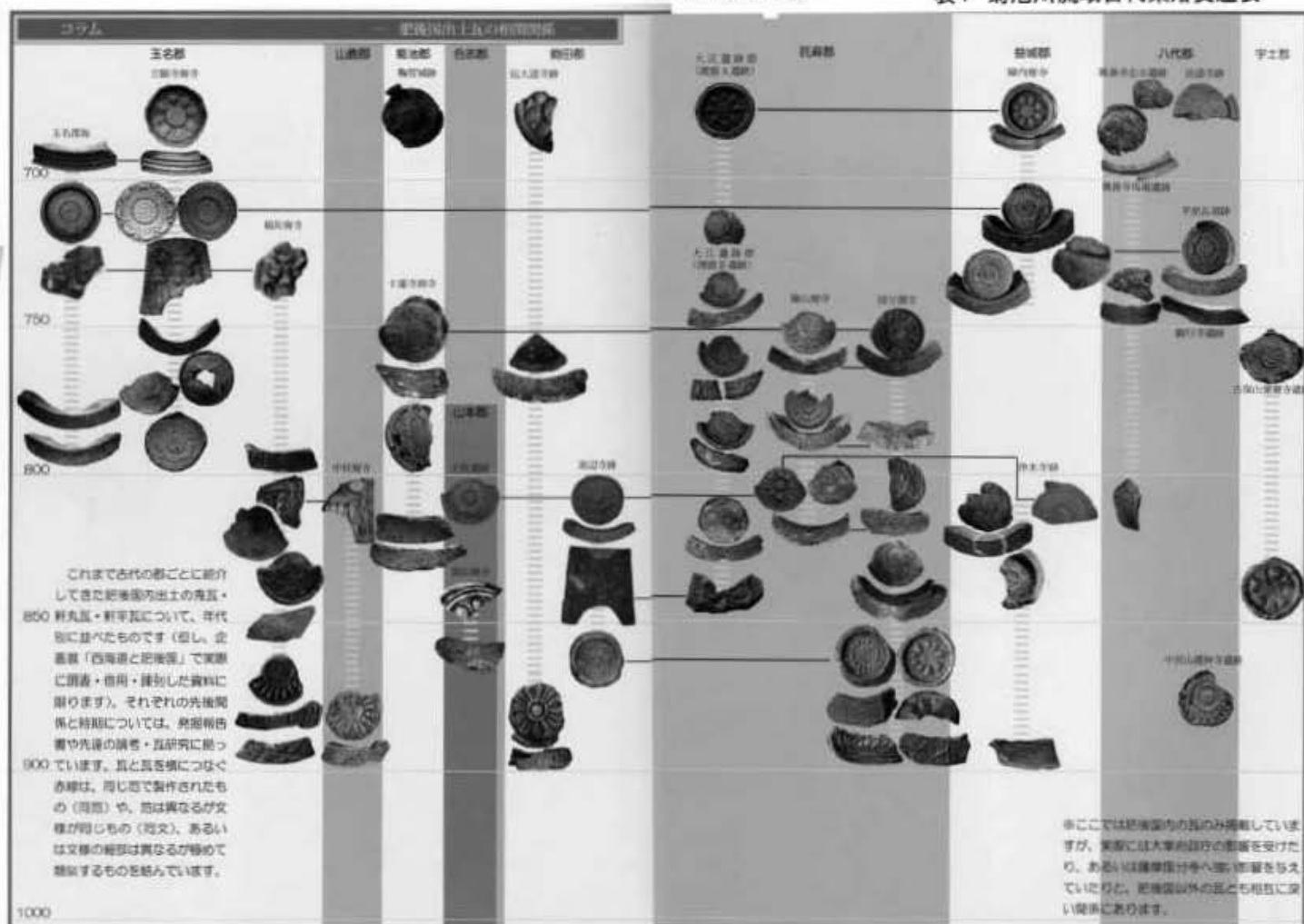
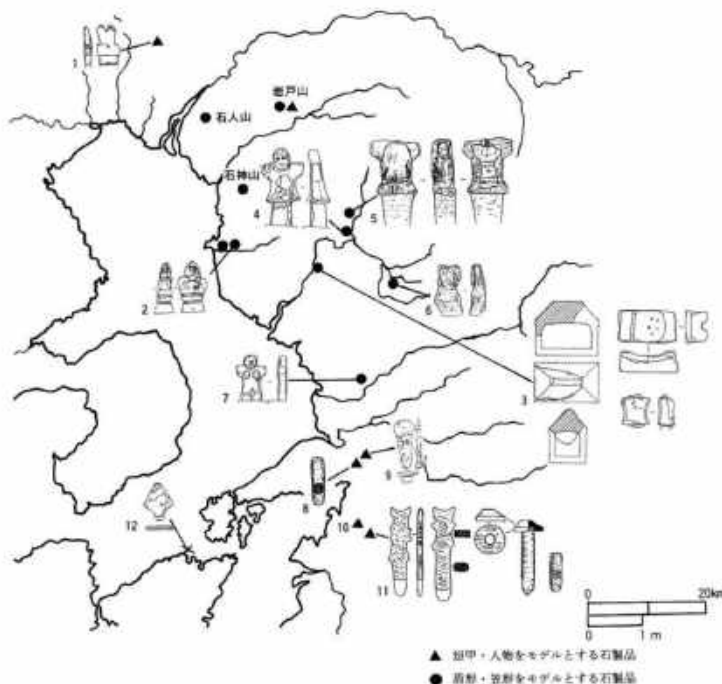


図8 郡単位の肥後国出土瓦の編年表

(「西海道と肥後国」熊本市立博物館 2011)



第1図 肥前肥後の石製品分布図

図12 肥前肥後の石製品分布図
(高木恭二 1994 岩戸山歴史資料館)



図3 肥後・主要な石屋形を有する古墳分布図

図 13 肥後・主要な石屋形を有する古墳分布図(宇野慎敏2010)



TK23 併行

高橋市穴塚古墳

MT15 併行か

鳥栖市岡寺古墳

肥水町塚地主古墳

TK10~TK43

八女市鶴見山古墳

比田町善蔵塚古墳

水系	所在地	古墳名	墳形	径
菊池川下流域	和水町	塚坊主古墳	前方後円墳	44
菊池川中流域	山鹿市	チブサン古墳	前方後円墳	45
	山鹿市	金屋塚古墳	前方後円墳	
矢部川流域	八女市	釘崎2号墳	前方後円墳	45
	八女市	鶴見山古墳	前方後円墳	104(87)
	八女郡広川町	善蔵塚古墳	前方後円墳	90
筑後川流域	筑後市	欠塚古墳	前方後円墳	45
	鳥栖市	岡寺古墳	前方後円墳	65
	鳥栖市	庚申堂塚古墳	前方後円墳	60

表 2 円筒埴輪押圧技法出土主要古墳

* 岸本圭「九州の埴輪 その変遷と地域性」2000

九州前方後円墳研究会

あ

畿内地方と共通する技法

➡ 筑後地方とのつながり

筑後地方と共通の技法

図14 押圧技法を有する円筒埴輪の編年



第4図 石川遺跡周辺の弥生、古墳時代等主要遺跡分布図・主要交通路想定図 (1/150,000)

図15 古墳時代植木東路
「石川遺跡」植木町教育委員会 2002

児湯の古墳群と同型鏡



図18 宇城市国越古墳画文帯神獸鏡
(日本の古代遺跡 鹿児島 鈴木重治)1985)

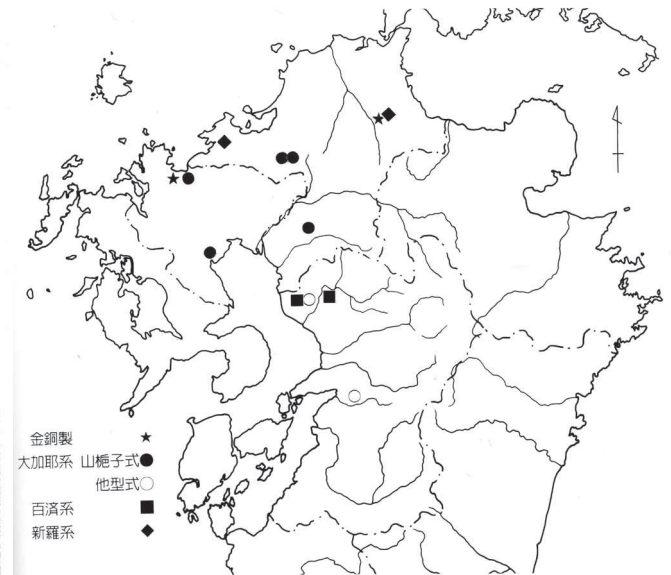


図16 垂飾付耳飾からみた九州地域の地域性
(5世紀後半～6世紀前半)

(「古墳時代の日韓交流～熊本・古墳文化をさぐる～」
(肥後考古学会・熊本古墳研究会)2002

	10期	終末期
関川流域		
菊水群		
南関群		
山鹿東群		
植木南群		
阿蘇谷		

図17 切石造り複室分横穴式石室編年図
(「国立歴史民俗博物館研究報告173」高木恭二2012)

御宇田妙見遺跡 (山鹿郡衙関連遺跡)



図19 鞠智城周辺古代遺跡等分布図

(菊池市教育委員会 菊池市文化財調査報告第6集を一部改変)

地名
郷名

※遺跡図は各報告書等に加筆補正。
縮尺不統一。上方が北。

⑥ワクト石遺跡

⑧大久保遺跡

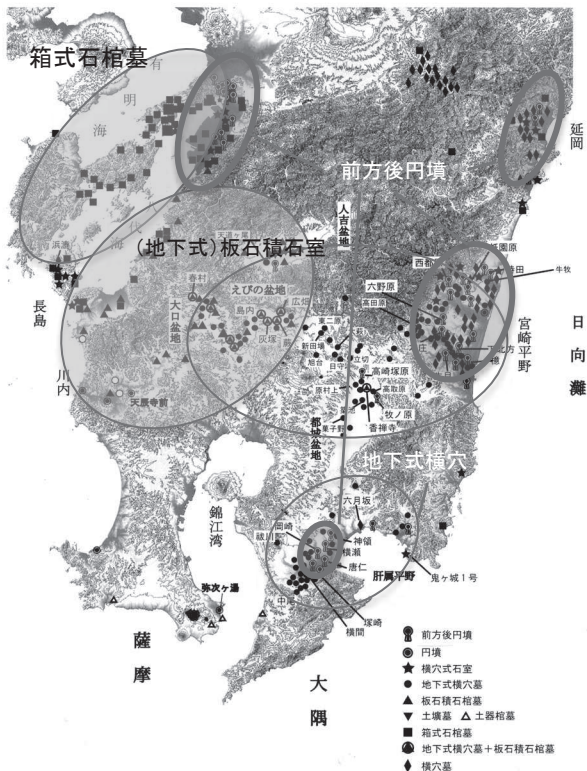


図20 九州南部の古墳墓形式分布

「南九州とヤマト王権一日向・大隅の古墳—2012 大阪府立近つ飛鳥博物館

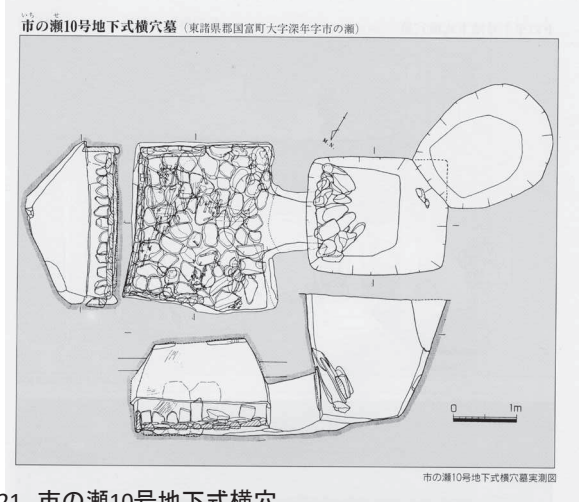


図21 市の瀬10号地下式横穴

国富町市の瀬10号地下式横穴墓
(「宮崎県の装飾古墳と地下式横穴墓」熊本県立装飾古墳館1995より転載)

「九州における首長墓系譜の再検討」
九州前方後円墳研究会 2011

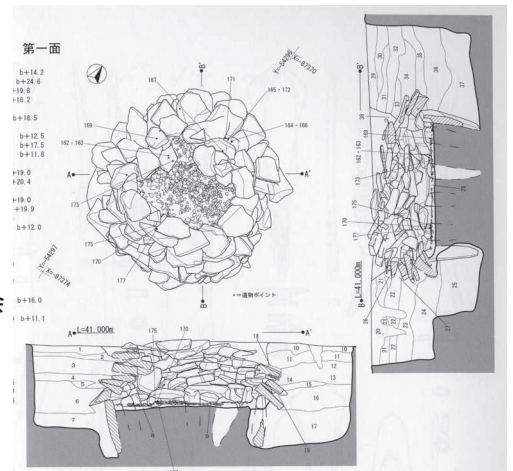


図22 水俣市北園上野古墳群SK28(地下式)板石積石室

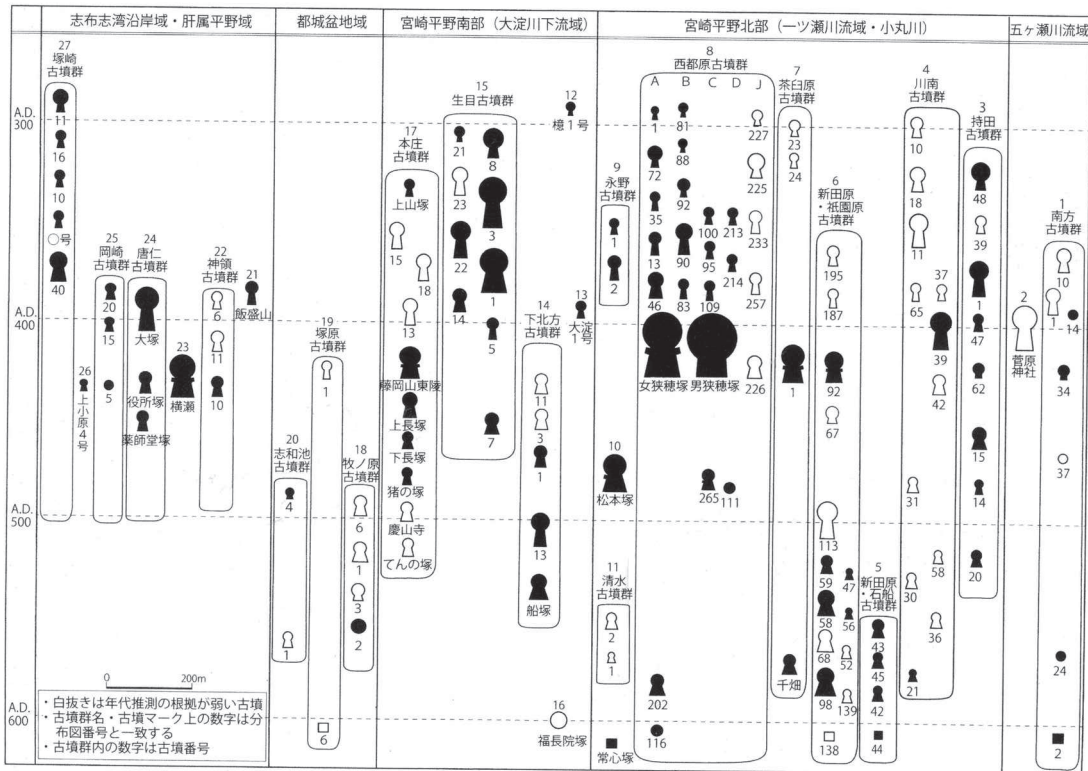


図23 南九州の主要首長墓群の変遷 (「南九州古墳文化の展開」柳沢一男2015)

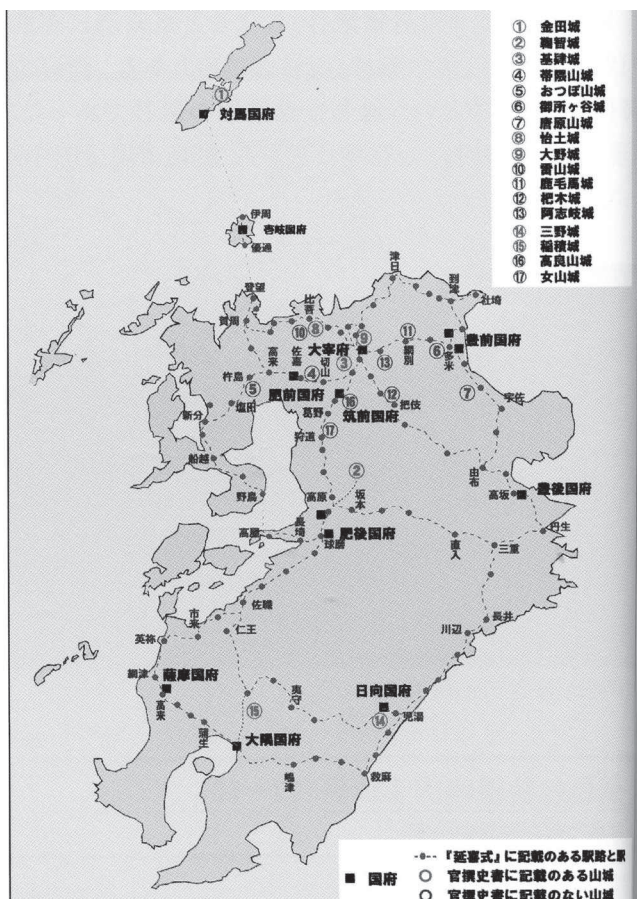


図24 西海道所有の古代山城と国府(「鹿児島」黎明館 2020)



図25 日向国分寺の瓦(九州古瓦図録 九州歴史資料館1981)

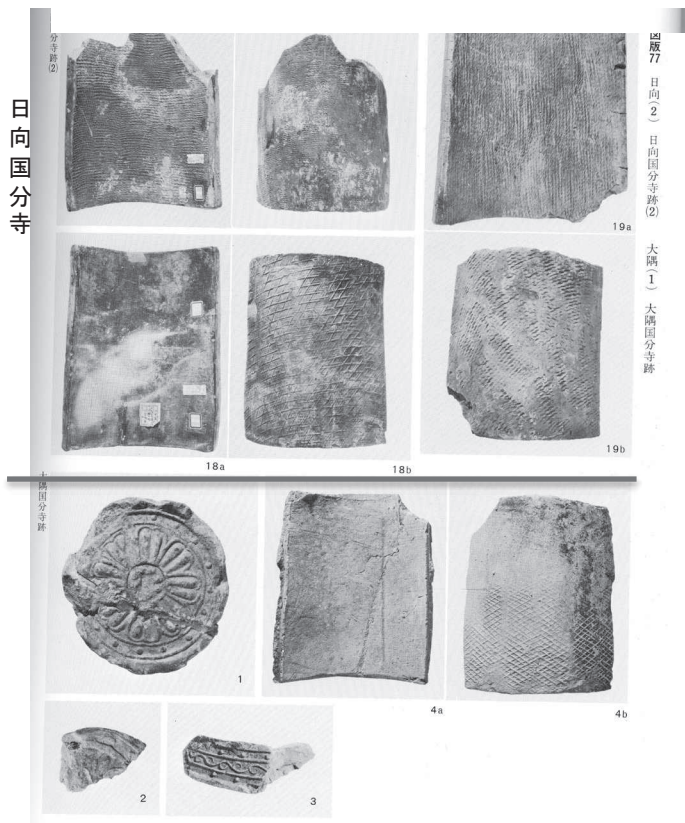


図26 日向・大隅国分寺の瓦(九州古瓦図録 九州歴史資料館1981)

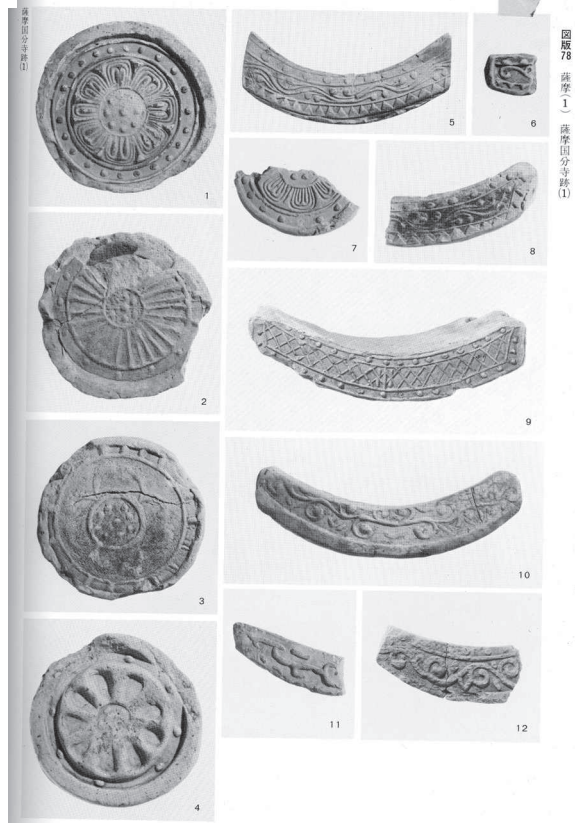


図27 薩摩国分寺の瓦(九州古瓦図録 九州歴史資料館1981)

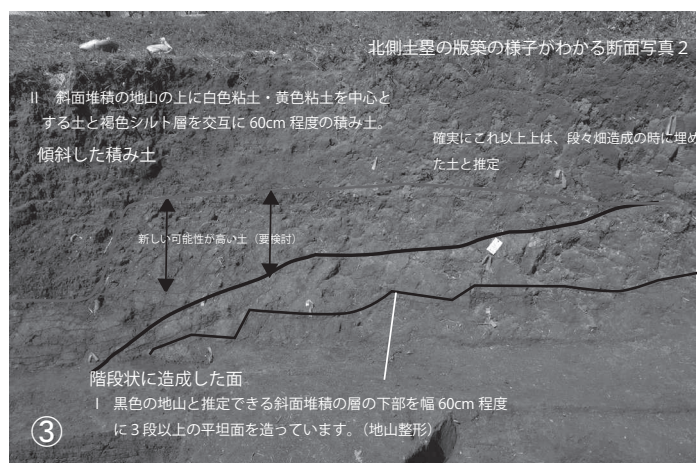


図28 深迫門北東壁付近北側土塁